



養豚の未来について語ろうよ!

食品循環資源を活かした養豚の未来を拓く!

食品循環養豚 全国会議 資料集

sample

食品循環養豚全国会議

平成16年12月14日(火曜日)

会場 メルパルクOKINAWA

主催 食品循環養豚全国会議実行委員会

食品循環養豚全国会議の開催にあたって（ご挨拶）

食品循環養豚全国会議に参加いただきまして、ありがとうございます。「食品循環養豚」という耳慣れない言葉は、食品加工くずや調理くず、廃棄食品、食べ残し等の食品循環資源を飼料として利用している養豚のことを意味する言葉で、私たちの造語です。

食品加工くずや残飯による養豚は、かつては全国で行われていましたが、配合飼料の普及など様々な要因によって、ほとんど廃れてしまいました。しかし、資源の節約、廃棄物の減量、食料自給率の向上などの観点から、食品循環資源の飼料としての価値をもう一度見直し、消費者や養豚農家にもその意義を再認識してほしいという考えから、「食品循環養豚」という新しい言葉を使うことにしました。

私たちが、沖縄で食品循環養豚に取り組み始めたのは平成14年度からですが、全国には先進的な取り組みをされている農家・法人がたくさんあります。幸い、全国の先輩方に私たちの考えをお伝えしたところ、志を同じくする人たちが連携・協力して、食品循環養豚の技術向上と理念の普及を図っていこうということになりました。

食品循環養豚は、資源を大切にするという理念を通して、ごみ問題や環境問題につながっています。また給食残渣の利用は、「食育」にもつながっています。食品循環養豚は、消費者とのコミュニケーションを図り、従来の養豚以上に、安全・安心できる肉を生産していくことが求められます。実際に、全国各地の取り組みは、市民・消費者と農家、養豚業者が協力して進めているものが少なくありません。

このように食品循環養豚は、養豚の新しい「形」に結実する可能性も秘めています。大げさないうなら、日本の養豚業の改革の糸口になる可能性があります。

私たちは、そのような壮大な理想を抱きつつ、全国の有志に呼びかけて、この会議を開催することにいたしました。食品循環養豚の輪が広がるきっかけになれば幸いです。

食品循環養豚全国会議実行委員長 石黒英治

◆◆ 目 次 ◆◆

はじめに

1. 基調講演 「我が国の未利用有機物資源の飼料・畜産的な利用」 1
(阿部 亮氏 日本大学生物資源科学部 教授)
2. 論文「未利用資源の有効利用に関する研究 米糠加高温発酵資材の豚給与試験」 5
(神奈川県畜産研究所 研究報告 第89号より)
論文「完成飼料の安全性評価」 9
(平成13年度即効型地域新生コンソーシアム研究開発事業「食品循環資源の大量・高度リサイクル技術の実用化技術開発」より)
(矢後 啓司氏 財団法人畜産生物科学安全研究所 嘱託研究員)
3. 食品循環養豚 全国事例の紹介
・地域ブランド食品循環型はまぼーく 21
(横浜・横浜農協 食品循環型はまぼーく)
・大阪のリサイクル養豚 33
(大阪・有限会社 関紀産業)
・放牧による黒豚の肥育 47
(鹿児島・有限会社 えこふぁーむ)
・くいまーるプロジェクトの発進 57
(沖縄・NPO法人 エコ・ビジョン沖縄)
・NPOがつなぐ養豚プロジェクト 67
(新潟長岡市・NPO法人 地域循環ネットワーク)

【参考資料】全国の豚肉ブランド一覧



我が国の未利用有機物資源の飼料・畜産的な利用

日本大学生物資源科学部

阿部 亮

I. 未利用有機物資源の飼料利用における理念と動態

◎家畜とはLive Stock Animalであることを再認識してはいかがであろうか。その意は、「通常は人間と食の競合をすることなく、人間の食糧生産・食生活の副産物・残渣を摂取し、いざの時に人間に対して高い栄養価を持つ蛋白質と脂肪を供給してくれる存在である。

◎リフキンの「脱牛肉文明」にあるように、家畜の穀類飼養は世界の環境問題と南北問題に一定の関わり、つまり負の影響をもたらす。その影響を低減する努力が世界各国に求められてよい。また、アメリカのトウモロコシに何時までも全面的な依存が出来るかに関する懸念材料も多い。

◎未利用有機物資源のリサイクル利用(飼料利用を中心として)は①家畜生産の低コスト化、②環境負荷低減、③飼料自給率向上、の視点から推進してゆかねばならない。農林水産省の飼料問題懇談会では「今後の飼料政策の展開方向」を平成14年にまとめているが、その中では環境調和を基本とした資源循環型畜産の推進を柱の一つとして掲げ、2,000万トンの食品廃棄物(食品製造副産物と食品残渣)の飼料利用の推進を施策とすることを表明している。

◎平成13年5月には「食品循環資源の再生利用等の促進に関する法律」(食品リサイクル法)が施行され、現在、食品残渣の飼料利用(リキッドフイードと乾燥飼料調製)が全国各地に展開されつつある。その多くは種々の課題を抱えながら健闘している状況といってよい。理念を持ち、資源循環型の社会を構築しようという意識が事業の支えとなっている。

◎輸入豚肉との価格競争に関しては経費の60%を占める飼料費の低減が必須の要素となるために、養豚問題懇談会等の場でも食品残渣飼料利用に関する論議が高まっている。

II. 飼料・畜産的利用の動向と飼料化課題

◎食品残渣の養豚用飼料としての利用の形態は大きく「リキッドフィーディング方式」と「乾燥方式」に分かれるが、前者は経営体は少ないが飼養頭数が多く、後者は数は多いが、規模は中小という経営体が多い。今後もその趨勢は変わらないであろう。

◎乾燥飼料の場合、養豚農家は市販の配合飼料に乾燥飼料を10~20%代替給与してい

横浜農協 食品循環型 はまぼーく出荷グループ

◆◇ 組織の概要 ◇◆

事業名	食品循環型はまぼーく		
報告者	横浜農協 食品循環型 はまぼーく出荷グループ 代表者 鈴木 孝利		
所在地	〒245-0015 神奈川県横浜市泉区中田西2-1-1 横浜農業協同組合 営農課内		
TEL	045-805-6612	FAX	045-803-6285
E-mail	—		
ホームページ	現在作成中		

◆◇ 養豚プロジェクトの概要 ◇◆

グループの設立日 (横浜の養豚)	2004(平成16)年4月1日 <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>横浜の養豚は戦後(昭和20年代前半)間もなく自宅の敷地内で1、2頭が飼われ、食事の残り物や畑で取れた野菜を給与し飼養していました。昭和40年代には横浜市内に小規模養豚を含めて約1500戸の養豚農家があった。 現在の横浜市内の養豚農家戸数は17戸で、後継者が経営者になっている。</p> </div>
肥育スタッフ	各農場家内労働1~2名 (グループ参加養豚農家数は12戸)
肥育面積	12農場は経営が別であるため面積の特定はできません
養豚場所	横浜市泉区を中心に戸塚区、都筑区に点在
常時肥育頭数	約10,000頭
年間出荷頭数	約20,000頭
肥育方式	12戸 全て一貫経営
肥育期間 (出荷体重)	30~115kgで約150日前後 (115kg)
肥育豚の種類	LWD



有限会社 関紀産業

◆◇ 組織の概要 ◇◆

事業名			
報告者	有限会社 関紀産業 代表取締役 川上 幸男		
所在地	〒598-0024 大阪府泉佐野市上之郷636-2		
TEL	0724-68-0045	FAX	0724-68-0044
E-mail	kanki@rinku.zaq.ne.jp		
ホームページ	http://www.rinku.zaq.ne.jp/kanki		

◆◇ 養豚プロジェクトの概要 ◇◆

養豚を始めた年	1973（昭和48）年
肥育スタッフ	2名
肥育面積	約500坪
養豚場所	大阪府泉佐野市上之郷636-2
常時肥育頭数	約600頭
年間出荷頭数	約1,500頭
肥育方式	一貫経営
肥育期間	7～8ヶ月
（出荷体重）	（枝肉重量にして7.0～7.5kg）
肥育豚の種類	LW×BD



養豚場の様子

農業生産法人(有)えこふぁーむ

◆◇ 組織の概要 ◇◆

事業名	農業生産法人(有)えこふぁーむ		
報告者	農業生産法人(有)えこふぁーむ 専務取締役 中村えい子		
所在地	〒893-1203 鹿児島県肝属郡高山町後田3098-2		
TEL	0994-31-5758	FAX	0994-65-2781
E-mail	ecofarm@ecopig.jp		
ホームページ	http://www.ecopig.jp/ecofarm/company.html		

◆◇ 養豚プロジェクトの概要 ◇◆

グループの設立日	2002(平成14)年
肥育スタッフ	3名
肥育面積	農場4ヶ所合計約:12000坪
養豚場所	* 大崎町野方発酵床繁殖農場設置;300坪26豚房 * 大崎町肥育農場;3000坪(1ヘクタール) * 輝北町山林放牧農場;4500坪 * 大崎町畑放牧農場;4500坪
常時肥育頭数	平成17年度計画 * 大崎町野方発酵床繁殖農場;母豚約35頭;雄3頭 * 大崎町肥育農場;40頭 * 輝北町山林放牧農場;60頭 * 大崎町畑放牧農場;60頭
年間出荷頭数	平成16年12月7日現在 約80頭
肥育方式	一貫経営
肥育期間	自家生産で約300日~360日
(出荷体重)	(140キロ)
肥育豚の種類	バークーシャー

◆◇ 食品循環資源を活用した肥育状況について ◇◆

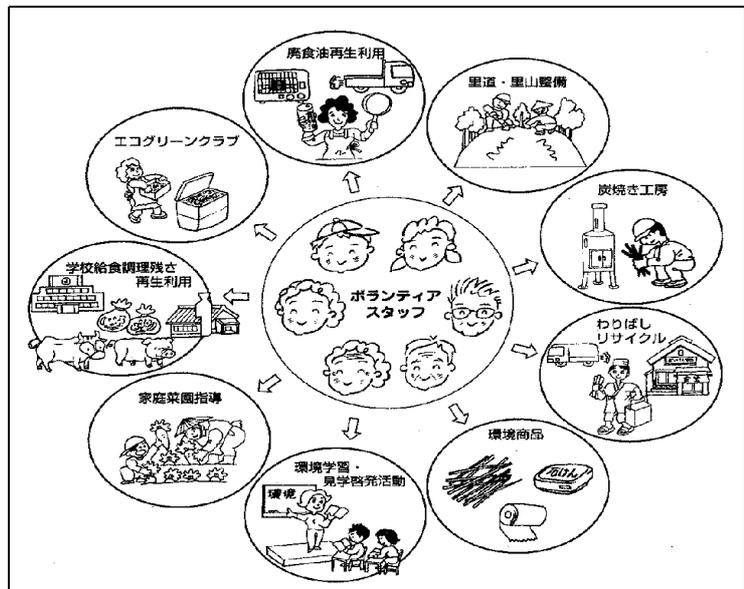
食品循環資源での肥育をはじめたきっかけ

特定非営利活動法人 地域循環ネットワーク

◆◇ 組織の概要 ◇◆ (提供していただいた情報をもとに実行委員会で作成しました。)

事業名	学校給食調理残さ再生利用活動		
情報提供者	特定非営利活動法人 地域循環ネットワーク 理事長 金子 博		
所在地	〒940-0029 長岡市東蔵王2-1-10 市民生活工房内		
TEL	0258-34-4450	FAX	0258-34-3722
E-mail	jnet@ba.wakwak.com		
ホームページ	http://park16.wakwak.com/~jnet/index.html		

循環ネットの 取り組み



「ゴミから資源へ」をキーワードに様々な活動を行っています。

○学校給食調理残さ再生利用活動

長岡市内の保育園・小中学校から、給食で出る野菜くずや食べ残しといった残さを回収して家畜の資料として利用しています。

○わりばしリサイクル活動

「わりばしメイト」として協力していただいている飲食店などから出るわりばしを回収・分別して、パルプや炭の原料として利用しています。

○エコグリーンクラブ

電気乾燥処理機で乾燥された生ごみを回収して、家畜の飼料にしています。回収重量に応じて、年2回肉として還元されます。

○里道・里山整備活動

柿町の味噌桶城址周辺の里道・里山の保全・整備活動を行っています。